

# 先生の推し本 「発見と行動」

三浦 徹

附属図書館企画展示  
2021年10月～12月

# 発見と行動

名誉教授・前附属図書館長 三浦 徹

miura.toru@ocha.ac.jp

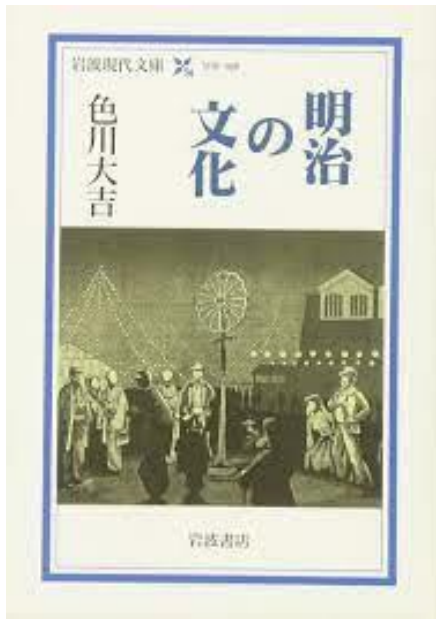
私は、決して読書家とはいえない。小中学生のころはもっぱら外で遊び、探偵小説以外の本を読むことはなかった。17歳のころ、人生と社会に悩み、本に答えを求めた。大学卒業後、出版社に勤め、雑誌と事典の編集に携わり、31歳で大学院に入学、本を読むことが仕事の一部となった。そんな私にとって、読書とは、なにかの発見や行動へと導いてくれるもので、一冊の本から芋づる式に知識が広がった。驚いたことに、今回の私の「押し本」の多くは、お茶大に所蔵されていた。私が感動した本は、選書を担当する図書館職員の日にとまる「時代の代表作」だったのだろう。いまここにこれらを展示し、みなさんと共有できることは、「時空をこえる」図書館ならではの営みである。

# 1 明治の民衆

色川大吉『明治の文化』岩波書店、1970（再刊1997）

『新編明治精神史』中央公論社、1973

鹿野政直『明治の思想』筑摩書房、1964



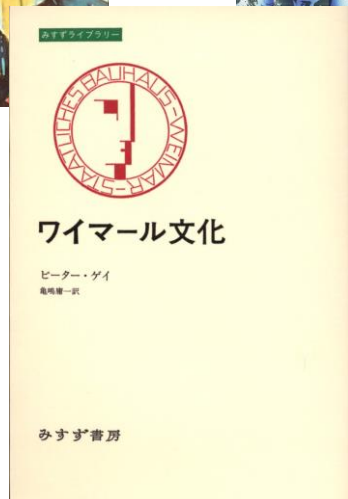
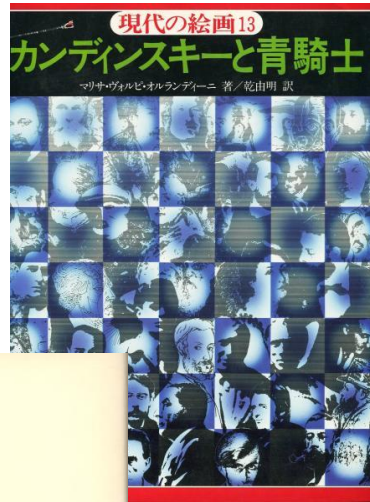
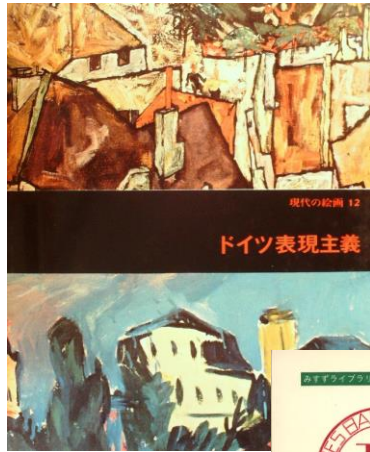
色川氏（2021年9月逝去）は、多摩（東京都）の民家に眠っていた自由民権運動期の憲法草案などの史料を発掘し、明治の青年たちがどのように西欧文明とむきあったのか、無名の人びとの軌跡を描き、民衆史の先駆けとなった。鹿野氏は、人は「なに」をではなく「いかに」語るかによって信頼する、という。社会の壁を前に、自分の無力を感じていたときに、一筋の光を感じた。

# 2 ワイマール文化の人びと

ピーター・ゲイ 『ワイマール文化』 みすず書房、1970（再刊1987）

『ドイツ表現主義』（現代の絵画12）平凡社、1974

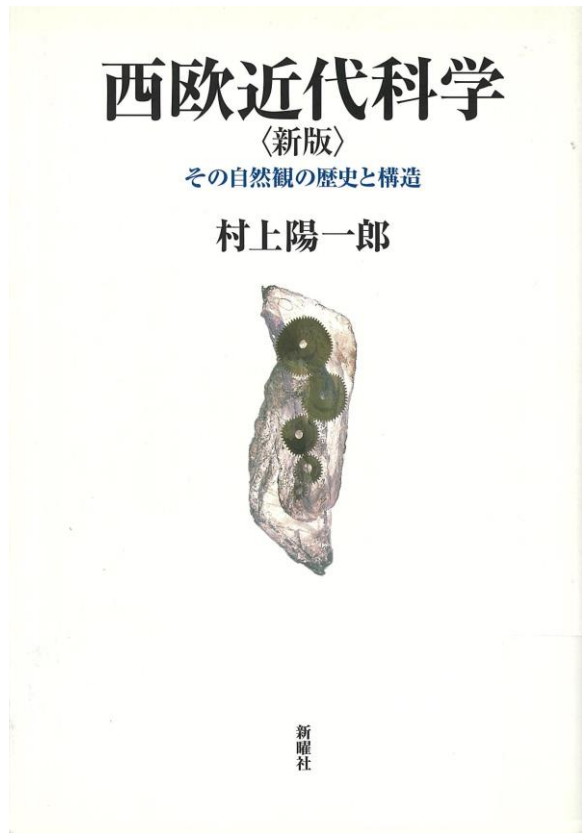
『カンディンスキーと青騎士』（現代の絵画13）平凡社、1974



ドイツ革命（1918）によって帝政が崩壊した後のワイマール時代、絵画、文学、演劇・映画、思想など革新的な運動が起こった。やがて国民はナチスを選ぶ。亡命したユダヤ系ドイツ人の著者が、ワイマール文化の未発の可能性を提示する。私の稚拙な卒業論文の種本となった。

# 3 西欧近代科学の創造

村上陽一郎  
『西欧近代科学：その自然観の歴史と構造』 新曜社、1971、新装版2002



著名な科学史家の出発点となった本。本書「まえがき」を引用する。

「自然科学が没価値的である、という命題は通常、しばしば真実として語られるが、それが一面の真理を含んでいるにせよ、これほど誤りを導きやすい言い方も少なからう。自然科学は近代に発生した価値観の一つである。それが「普遍的」な有効性を持っているということは、それが、「没価値的」であることを意味しない。本書の根本的な目的は、そうした意味で、人類が、近代において、いかなる価値観の採用を決意したか、その決意の内容を探求することにある。」

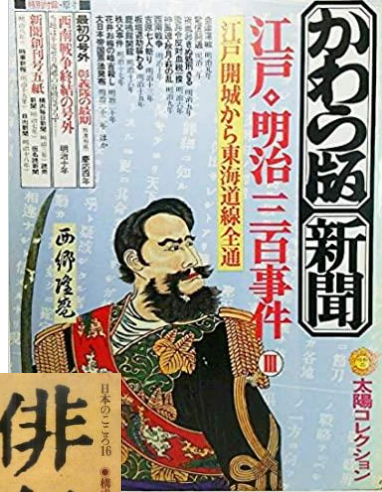
大学で著者の講義をきき、「科学」は人間不在の客観であるという強迫観念が消えていった。

# 4 日本に息づく生活文化

別冊太陽『いけばな』 平凡社、1975

別冊太陽『俳句』 平凡社、1977、同愛蔵版1980

別冊太陽コレクション『かわら版・新聞』 平凡社、1978



大学を卒業後出版社に就職し、3年間『別冊太陽』「日本のこころ」シリーズという図版資料が半分をしめる特集雑誌を担当した。カメラマンと全国を回り、資料を撮影し、解説を書いた。日本の生活文化に出会い、生の資料が問いかける力を思い知った。未公開の個人蔵資料をも収録する本シリーズは、アーカイブズともいえる。

# 5 事典という知

『世界大百科事典』（全16巻）  
平凡社、1985

百科事典は、単なる専門分野ごとの知識の寄せ集めではない。新版（1985年版）の特徴は、具体的な「事から」

（事象）や言葉に即して、知を総合することを方針とし、諸地域・諸文化に共通する項目を重視した。

例：家、市、婚姻、刑罰、裁判、商人、職人、相続、旅、都市、墓、村、もてなし、道、離婚・・・

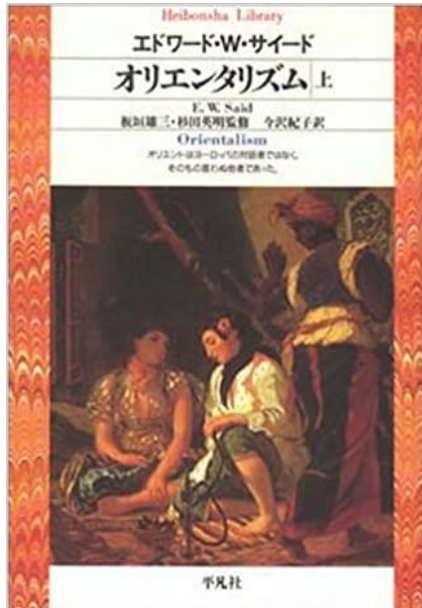
『イスラム事典』 平凡社、1982

『新イスラム事典』 平凡社、2002

1978年に事典編集部に異動した。百科事典は平凡社の看板商品で、創業者下中彌三郎は、農民運動家と教員の経験をもち、耳で聞いたまま「引くこと」ができる事典こそ民衆の「野の学問」であると考えた。その全面改定版の編集に加わり、また日本で初めての総合的なイスラム事典を企画・刊行した。2年後、大学院の門を叩いた。

# 6 オリエンタリズムという二分法

エドワード・サイード  
『オリエンタリズム』 平凡社、1986  
(1993平凡社ライブラリー)



エドワード・サイード  
『パレスチナ問題』 みすず書房、2004



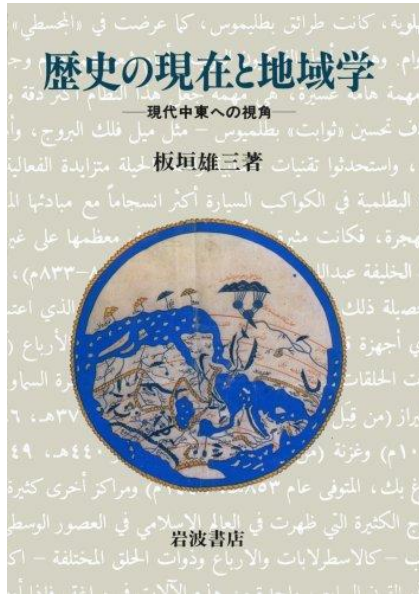
「東洋VS西洋」や「男VS女」に代表される、人間世界を二つに分ける思考法の根深さを抽出した「オリエンタリズム」（原書1978）は、世界中で広く読まれ、数多の関連書が刊行されている。日本語版を企画し、翻訳に5年を要したが、原書よりも分かりやすい本ができあがった。



# 7 歴史の現在：パレスチナ問題

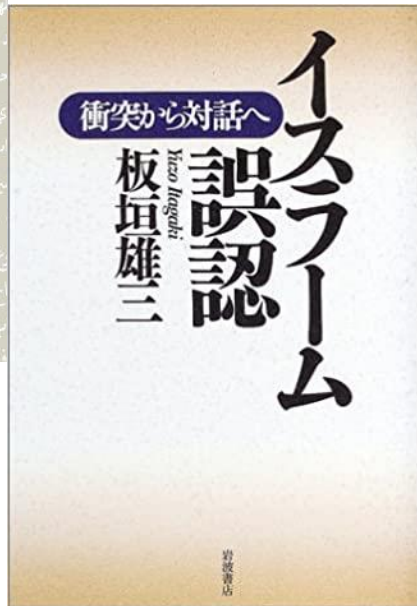
板垣雄三

『歴史の現在と地域学 現代中東への視角』 岩波書店、1992



板垣雄三

『イスラーム誤認』 岩波書店、2002

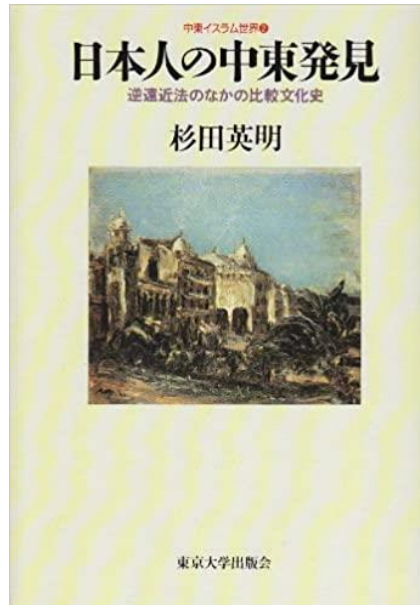


1973年10月、第4次中東戦争は、オイルショックを誘発し、日本と中東が地続きであることを知らされた。このとき開講された著者板垣先生の授業にでて、はじめて中東・アラブ世界を知った。本書は、歴史の現在を問い、所収の「ユダヤ人問題の重層化」では、投石し抵抗するパレスチナ人の姿に、聖書や日本中世にも共通する「石の叫び」を読み取る。

# 8 日本人の中東発見

杉田英明

『日本人の中東発見：逆遠近法のなかの比較文化史』 東京大学出版会、1995



杉田英明

『アラビアン・ナイトと日本人』 岩波書店、2012



古くは奈良時代にシルクロードや中国を經由して、戦国時代や明治にはヨーロッパを經由して、日本は中東の文化に接していた。他方、9世紀のアラブの地理書には「ワークワーク」という名前で日本が登場する。日本と中東はお互いをどのように認識し発見したのか。比較文学を専門とする著者が、膨大な文献を渉猟し、両者の出会いを描く。

# 8 附録 お茶大の中東発見

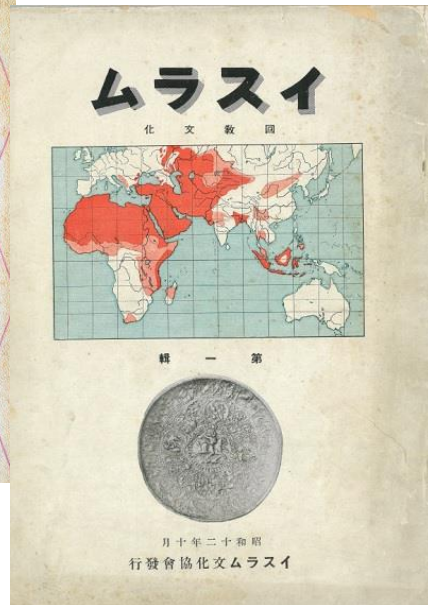
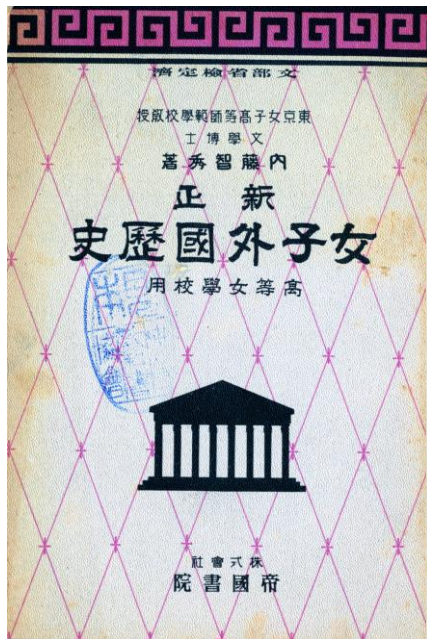
## 内藤智秀（東京女子高等師範学校教授）

『新正女子外国歴史 高等女学校用』 1938

『東西文化の融合』 六盟館、1942

『トルコ民族の風俗』 八木書店、1942

『イスラム 回教文化』 創刊号  
イスラム文化協会、1937

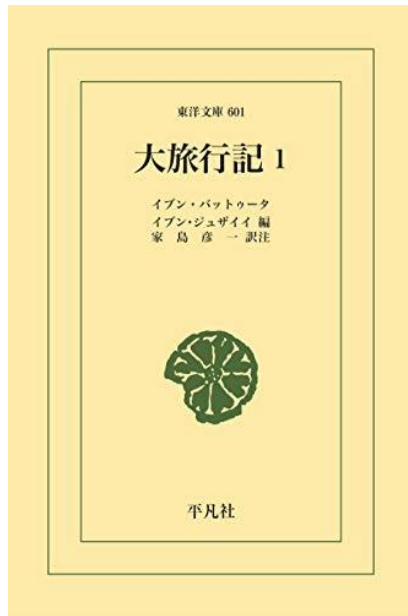


日本の中東研究の先駆者（第一世代）。1920年代にトルコの日本大使館に勤務、1930年代は東京女高師（お茶大の前身）の教員を勤め、中東に関わる100点以上の著作を著した。お茶大には著作や貴重な資料が伝えられている。

# 9 14世紀のグローバル世界

イブン・バットゥータ（家島彦一  
訳・解説）『大旅行記』

平凡社（東洋文庫）全8巻、1996-2002



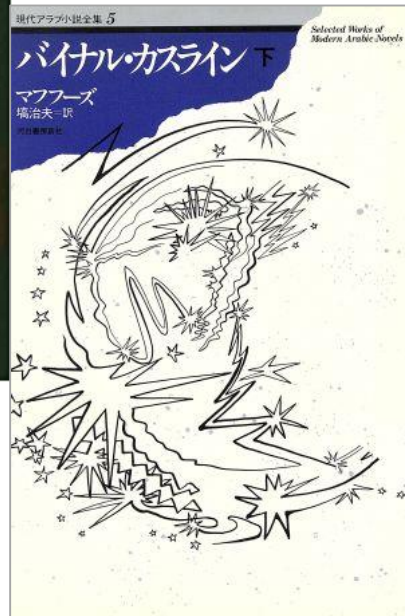
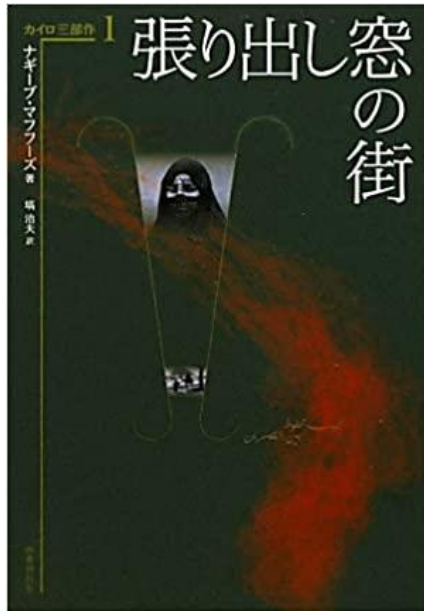
家島彦一『イブン・バットゥータ  
の世界大旅行：14世紀イスラーム  
の時空を生きる』平凡社、2003

14世紀に、モロッコから南アジア、東南アジア、中国まで、30年にわたって旅をしたイブン・バットゥータの旅行記の全訳。訳者家島氏は関連する写本や研究文献を博捜し、正確な訳と詳細な注・解説をつけた。私たち読者は、14世紀の世界各地の姿を、著者・訳者と一緒に体験できる。

# 10 カイロの下町小説

ナギーブ・マフフーズ

『カイロ三部作』 埴治夫訳、国書刊行会、  
2011



『現代アラブ小説全集（バイナル・カスライン）』（全10巻）

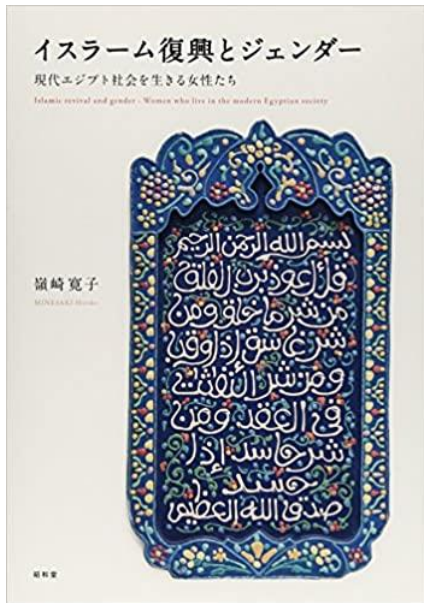
河出書房新社、1978-80（1988-89新装版）

ノーベル賞を受賞したマフフーズの代表作。カイロの旧市街（下町）の商人の一族が主人公で、第一次世界大戦後、英国からの独立運動にゆれるエジプト社会を描く。現代アラブ小説全集には、アラブ世界の著名な作家たち（1980年代まで）の作品が収録されている。

# 11 イスラームと女性たち

嶺崎寛子

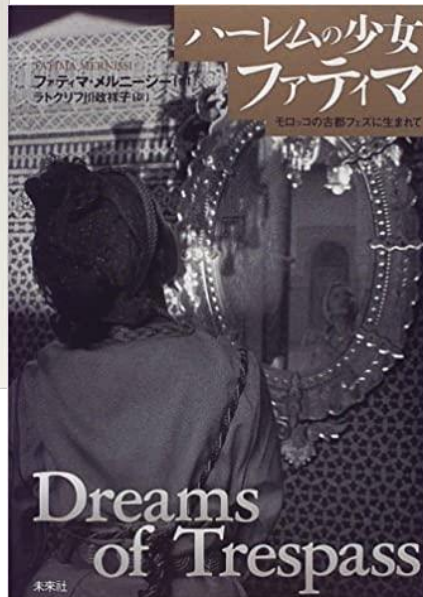
『イスラーム復興とジェンダー：  
現代エジプト社会を生きる女性たち』 昭和堂、2015



ファティマ・メルニーシー『ハーレムの少女ファティマ：モロッコの古都フェズに生まれて』 未来社、1998

（左）著者は、2003年からカイロに留学、「イスラーム電話」とよばれる電話相談サービスの取材等から、女性の生活のなかでのイスラームとジェンダーの規範のせめぎ合いを描いた。私も、嶺崎さんの案内で、ヴェールショップや電話相談室を訪問した。

（右）国際的に著名なフェミニスト・社会学者の自伝的小説。



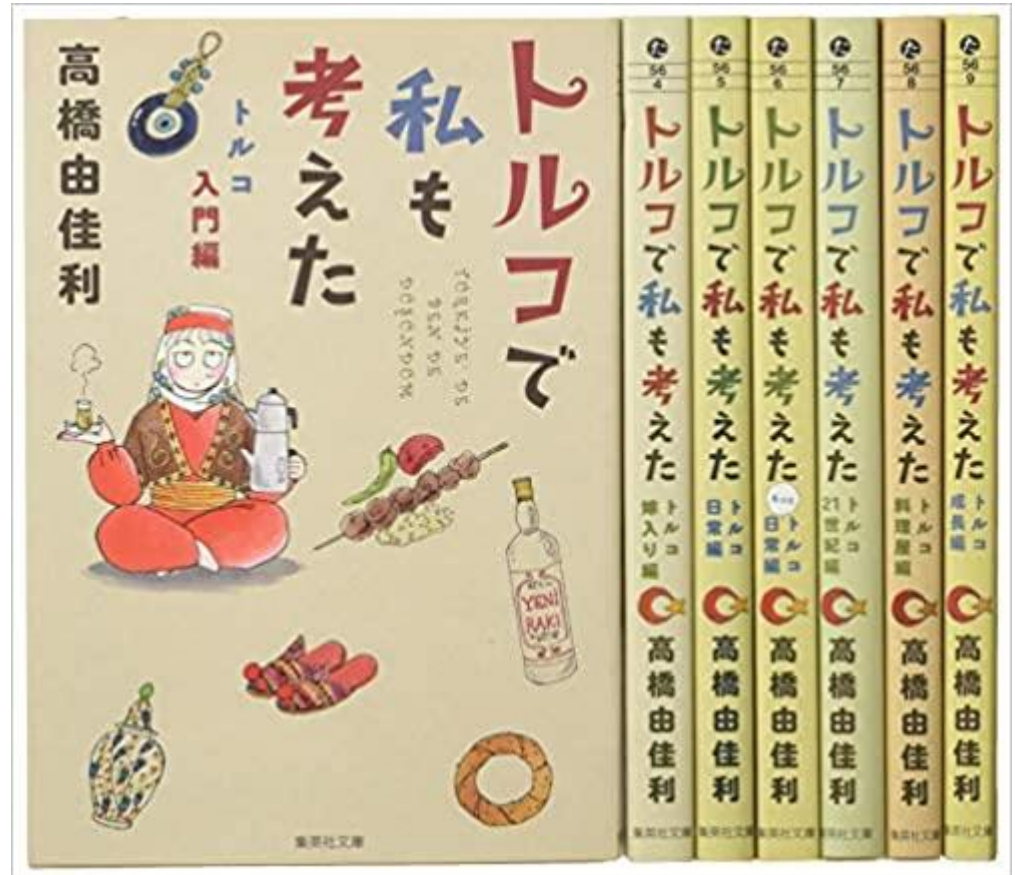
# 11付録 楽しくわかるマンガ本

ユペチカ

『サトコとナダ』 講談社、2017

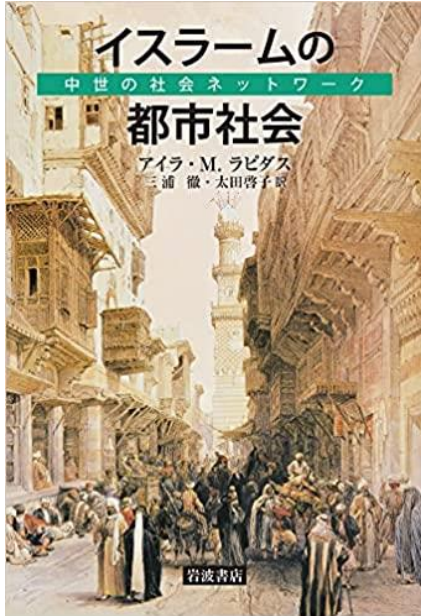
高橋由佳利

『トルコで私も考えた』 集英社、2017



# 12 都市に生きる人びと

アイラ・ラピダス（三浦徹・太田啓子訳）『イスラームの都市社会：中世の社会ネットワーク』岩波書店、2021



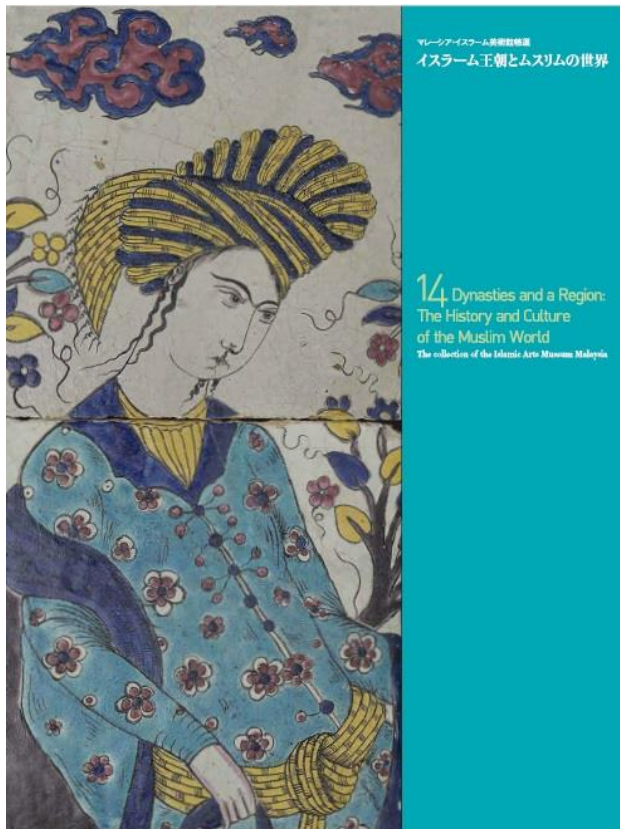
三浦徹  
『イスラームの都市世界』山川出版社、1997

原書（英語、1967）は、13-16世紀のシリア・エジプトの都市社会を、同時代のアラビア語資料をもとに、人的ネットワークを活写したもので、都市研究の古典となった。私が通読した初めての英書で、これにひかれてイスラーム都市研究の道を歩んだ。



# 13 美術からみるイスラーム

『イスラーム王朝とムスリムの世界』 東京国立博物館、2021



2021年7月から、東京国立博物館で、イスラーム世界全域に及ぶ美術展が開催されている（2022年2月まで）。コーランから現代アートまで、マレーシア国立イスラーム美術館の所蔵品200点が展示され、絵画、陶器、書物、装飾品、生活用品まで、各地域で発展したイスラーム美術を概観することができる。